

前橋市の野鳥

～ 平成 20 年度 前橋市自然環境調査（鳥類） 概要版 ～



平成 21 年 3 月
前橋市

調査の目的

前橋市は、赤城南麓に代表される豊かな森林、利根川や広瀬川をはじめとする大小多数の河川、農地や公園などの自然的な空間など、様々な環境をもつ美しい緑豊かなまちです。

しかし、私たち人間の生活様式の変化などにより、植物や動物が生育・生息する環境は失われつつあり、昔は当たり前に見られた生き物が見られなくなり、逆に昔はいなかった生き物が新たに出現するなど、変化が出てきています。

生き物を継続的に調査し情報を蓄積することで、人間の目からだけではなく、これらの環境の中で実際に生活している“生き物の視点”から環境の変化を捉えることができます。

前橋市では、その取り組みの一つとして、平成9年度から10年度にかけて、基礎調査として、市内で見られる動植物（植物、鳥類、哺乳類・は虫類・両生類、魚類・水生生物、昆虫）の一斉調査を行いました（大胡・宮城・粕川地区では平成17年度に実施）。また、その後も継続して、毎年、調査対象ごとに追跡調査を続けており、平成20年度は「鳥類」を対象に調査を行いました。

追跡調査では、専門家による調査の他、市民の皆さんに、自宅の周りや公園などの身近な自然について調査していただく「市民調査」も実施しています。

これからも、私たちが受け継いできた前橋市の美しい自然を大切にしていきたいと思います。

調査の概要

平成20年度は、前橋市による「鳥類相調査」、市民による「庭に来る鳥調査」を行いました。また、「庭に来る鳥調査」の説明会を兼ねて、野鳥観察会を行いました。

調査項目	実施者	調査実施日・期間	調査地点
鳥類相調査	前橋市	①平成20年5月31日～6月1日（繁殖期） ②平成21年1月5日～6日（越冬期）	市内の13地点 ^注
野鳥観察会	市民	平成21年1月25日	嶺公園
庭に来る鳥調査 （市民調査）	市民	平成21年1月25日～2月20日	市内全域 （参加者各自の庭や 身近にある公園など）

注）調査地点の位置は、2ページの図をご覧ください。

◆調査の方法

鳥類相調査

専門家が歩きながら双眼鏡で確認種と確認個体数を記録する方法（ラインセンサス法）で行いました。



野鳥観察会

市民と野鳥の会の会員が一緒に歩きながら双眼鏡で確認種を記録する方法で行いました。



庭に来る鳥調査

市民が自分の家の庭や近くの公園で野鳥の観察を行い、市に報告する方法で行いました。



※表紙の写真：（上）モズ、（左下）オシドリ、（右下）アカゲラ

調査地点とその環境

前橋市は、北部に位置する赤城山の中腹（海拔 1,571.9m）から、中央部から南部にかけて広がる平坦な土地（海拔 100m前後）まで、緩やかに傾斜しており、その中に、森林、河川、池・沼、水田、畑、住宅地など、さまざまな環境をもっています。

今回の調査では、基礎調査で設定した 10 地区 24 地点の中から、10 地区 13 地点を選び、調査を行いました。

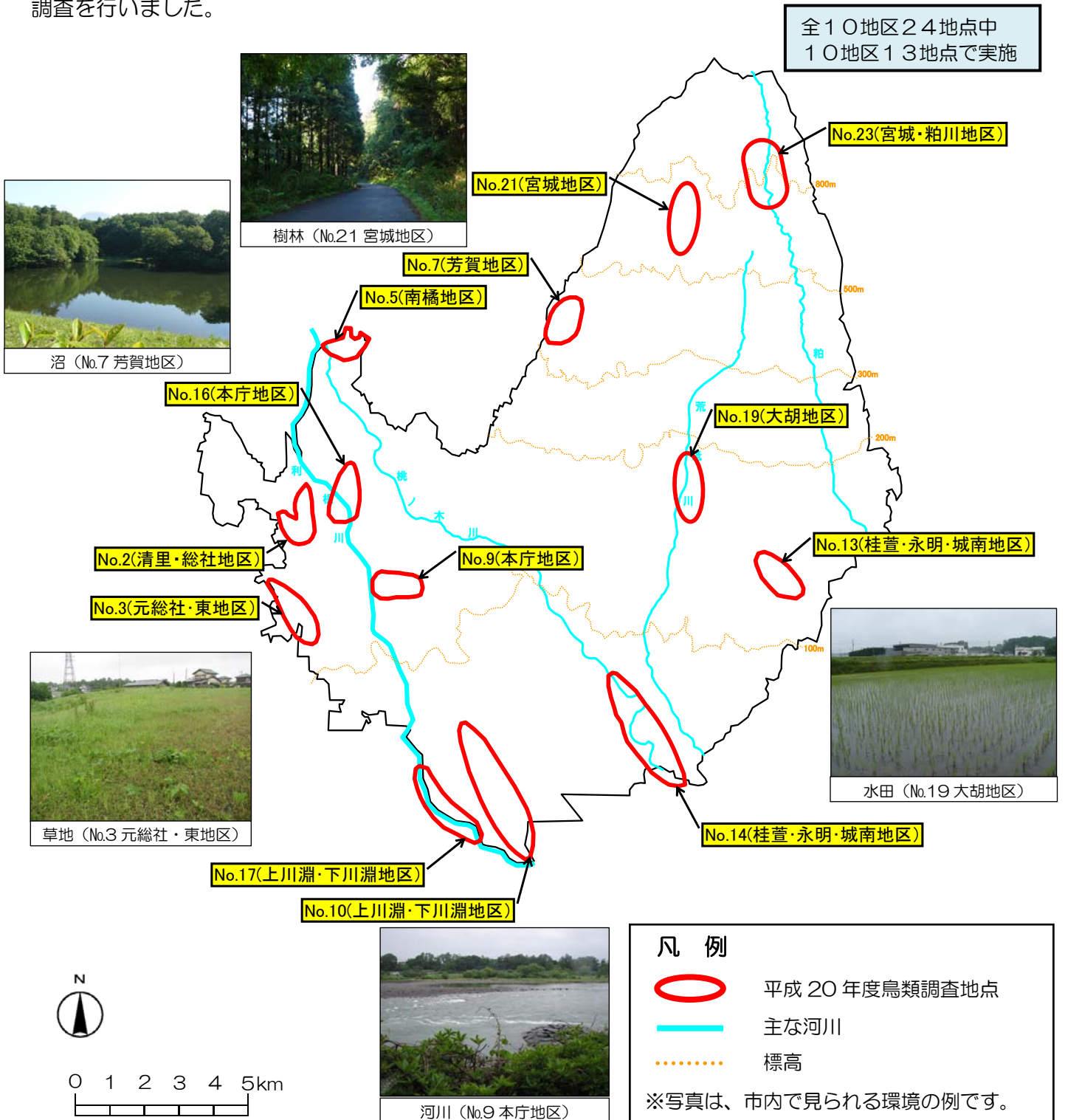


図 調査地点の位置

調査結果

今回調査の結果、繁殖期（初夏）34 科 64 種、越冬期（冬季）29 科 70 種、合計で 36 科 91 種の鳥類を確認しました。

確認種は本市で見られる環境を反映し、アカゲラやマミシロ、サンコウチョウなどの樹林に生息する種、ウグイスやホオジロなどの林縁周辺に生息する種、モズやオオヨシキリなどの草地や耕作地に生息する種、オシドリやカワセミなどの水域周辺に生息する種、ツバメやスズメなどの人家周辺に生息する種などが見られました。この中には、外来生物であるコジュケイやカオジロガビチョウ、家禽（飼育種）であるアヒルも含まれています。

確認種が多かった地点は河川、池・沼、樹林、草地など多様な環境が良好な状態で残されていると考えられます。

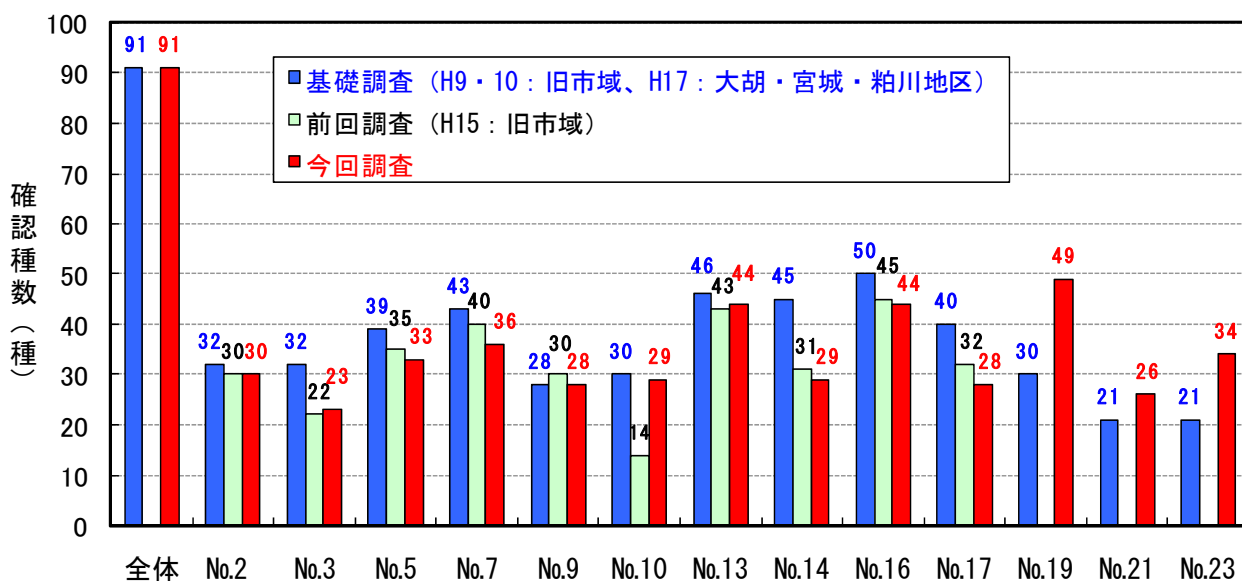


図 地点別の確認種数

トピックス1 鳥の経年調査から見えてくること

日本には約 540 種の野鳥がすんでいるといわれています。これらの鳥が、どの時期に、どこで確認されたかを知ることは、その場所の環境の変化を知る上で、大変重要な情報になります。なぜなら、たとえば森や林が減ると、木の実を好んで食べる鳥や、木につく虫を食べる鳥なども、同時に減っていくと考えられるからです。

また、鳥の中には「渡り」ということをする種があり、環境の変化を教えてくれることがあります。たとえば、南方から日本に渡ってくる鳥たちが減ることは、東南アジアの熱帯雨林などの伐採が関係しているのではないかと、という説があります。逆に、寒いロシアから渡ってくる鳥が、気候が暖かくなったせいか、日本の北の方でとどまったりもします。このように、鳥は、私たちの身近な自然環境の変化だけではなく、地球規模での環境の変化を教えてくれるバロメーターにもなっているのです。

このような鳥の増減と生息する環境の変化との関係については、できるだけ継続して観察し、判断する必要があります。あなたも、身近な環境で生活している鳥に目を向けてみませんか。去年と同じ種類の鳥が来るのか、新しい種類の鳥に会えるのか、鳥たちが環境の変化を教えてくれるかもしれません。



ルリビタキ



ホオジロ



イワヒバリ



ダイサギ

注目すべき鳥類の確認状況

注目すべき鳥類として、オシドリ、ミサゴ、オオタカ、ハイタカ、サシバ、アオバズク、オオアカゲラ、サンコウチョウの5科8種が確認されました。

これらの種は、「群馬県の絶滅のおそれのある野生動物」などに該当する希少種であり、今後の動向が注目される種です。

表 注目種の確認状況

地区・地点 No.		南 橘	芳 賀	桂 萱 ・ 城 南 ・ 永 明	本 庁	大 胡	宮 城 ・ 粕 川	注目種		
科名	種名	No.5	No.7	No.13	No.16	No.19	No.23	①	②	③
カモ	オシドリ			●					DD	注目
タカ	ミサゴ					●			NT	
	オオタカ	●	●	●	●	●		国内	NT	準
	ハイタカ			●					NT	準
	サシバ		●						VU	Ⅱ類
フクロウ	アオバズク					●				Ⅱ類
キツツキ	オオアカゲラ						●			注目
カササギヒタキ	サンコウチョウ	●								Ⅱ類

注 1) 表中の記号凡例 ●：確認された注目種

注 2) 注目種の選定基準について

① 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律施行令」（2008年改正,政令第238号）における国内希少野生動植物種

国内：国内希少野生動植物種

② 「鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物のレッドリストの見直しについて（環境省版レッドリスト）」（環境省,2006年）

VU：絶滅危惧Ⅱ類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足

③ 「群馬県の絶滅のおそれのある野生動物リスト」（群馬県ホームページ,2001年）

Ⅱ類：絶滅危惧Ⅱ類 準：準絶滅危惧 注目：注目

トピックス2 豊かな里山の象徴 オオタカ

オオタカは、比較的人里に近い樹林、「里山」の生態系の頂点にいる鳥で、その姿が美しいことでも知られていますが、現在では個体数が少なくなり、「種の保存法」という法律で保護される鳥の一種に指定されています。



オオタカ

オオタカが暮らす里山は、かつては人間が定期的に伐採をしたり、下枝を切るなどの管理をしてきたことで、巣を作りやすい樹木があり、餌となる小鳥も多いなど、絶好の生息場所となってきました。

ところが近年、薪や落ち葉を肥料として使う田畑の減少などにより里山が荒れてきたこと、巣をつくるアカマツなどにマツ枯れ病が発生していること、人間によって森林が開発されたことなどで、すみかを追われ、その個体数は徐々に少なくなりつつあると考えられます。

オオタカをはじめとする鳥類が暮らす豊かな里山環境を維持していくためには、ただ単に樹林を残すだけではなく、昔ながらの里山として管理していく必要があります。行政や市民が協力しあって、これらの豊かな里山環境を維持していく活動が、これからの時代には必要とされています。

市民調査の結果(1)

市民参加による「庭に来る鳥調査」の結果、参加者 36 名から、市内 46 地点における調査結果が寄せられました。

調査結果をもとに、市内で確認された鳥の種数の分布を、1km 四方のメッシュに示しました。

確認種数の多い地点の環境を見ると、八幡川や利根川などの河川沿いや、河川に隣接する住宅地の庭、樹林だけではなく池や沼、湿地を公園内あるいはその周辺に有する公園などで構成されていました。これらは複数の環境を含む地点であることから、森林やその周辺を利用する鳥類、水辺や水辺の周辺を利用する鳥類、人家周辺を利用する鳥類など、それぞれの環境を利用する鳥類が複合的に確認されているためと考えられます。

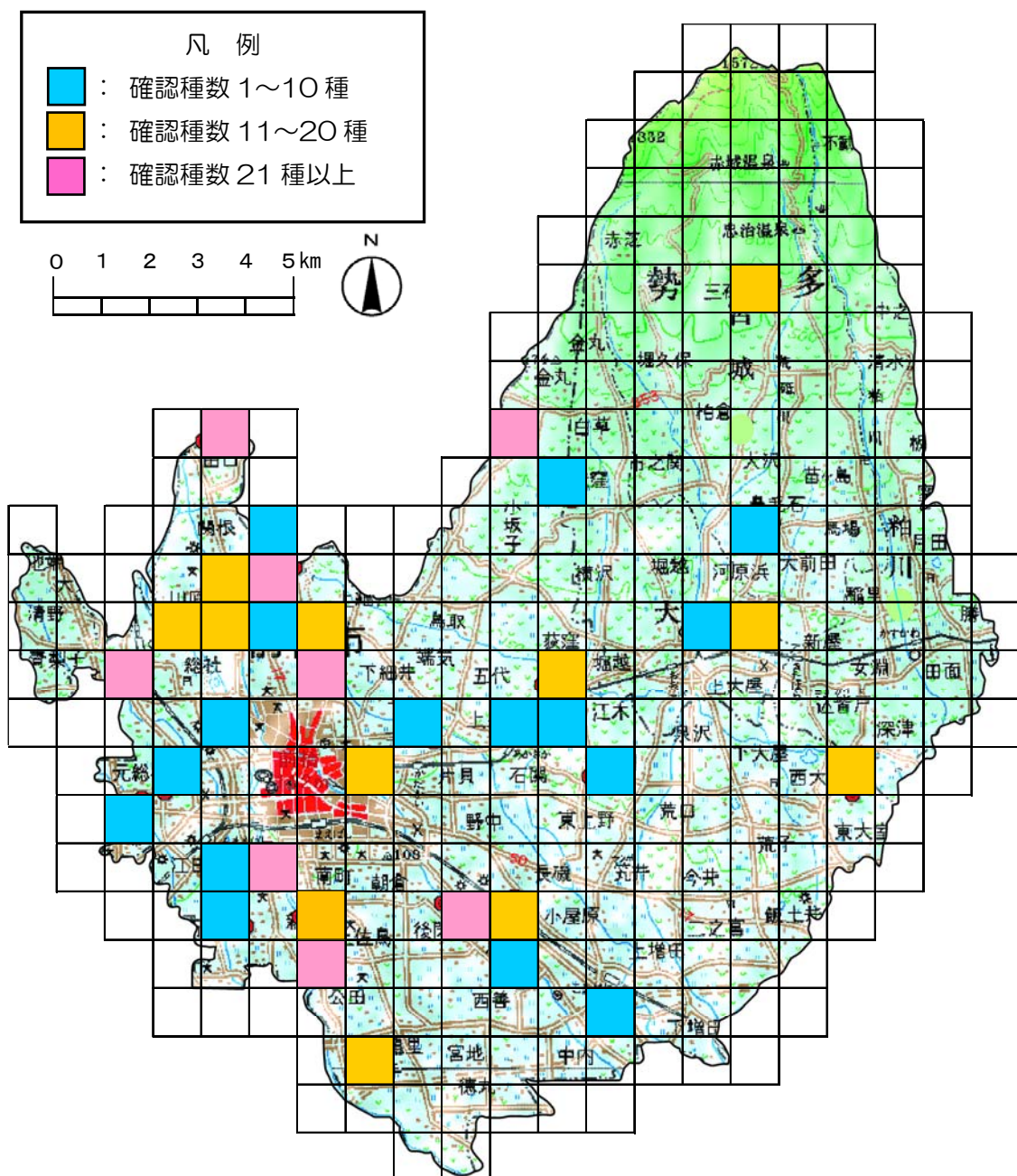


図 「庭に来る鳥調査」で確認された鳥の種数分布

市民調査の結果(2)

参加者の声 ～ ご参加ありがとうございました ～

- ・ 1月の下旬にキジバトが子育てをして、2羽が育ち、親の後を追って飛び出して行った。現在も又、枝をくわえ巣作りをしている。(亀泉町)
- ・ 休耕農地が多くなり、冬野菜の栽培が減少しているので、餌を求めて他に移動し減少したのではないかと。耕運機の後ろをムクドリ、ハト、ハクセキレイ、カラス等が餌を探し追いかける姿が見られなくなり、さびしい。(青柳町)
- ・ 1月下旬に剪定したカエデの枝から滴る樹液にヒヨドリ、メジロが来た。樹液が止まり、ミカンが無くなるとメジロが来なくなった。(堤町)
- ・ 数をかぞえています、さっと来てすぐ去るのがカラスとスズメで、滞在時間の長いのがヒヨドリとメジロです。これは実や花をたべているからでしょうか。(光が丘町)
- ・ 庭のムラサキシキブの実が沢山なっていた頃はメジロやジョウビタキ、モズやオナガと多くの鳥が入り代わり立ち代わり訪れていた庭も、1月に入って実が無くなると引くようになくなり、代わってスズメとヒヨドリが中心の訪問者へと変わった。(横手町)

調査結果とあわせて、撮影された写真もお預かりしました。その一部を紹介します。



キジバト



オオタカ



メジロ

トピックス3 外来生物がそのまま増え続けると…

「外来生物(外来種)」という言葉を目にしたことはありますか? 「外来生物」とは、もともとその地域にいなかったのに、人間の活動によって外国から入ってきた生物のことを指し、日本に生息する外来生物の数は、わかっているだけでも約2,000種にもなります。

前橋市の鳥の調査でも、カモの仲間のバリケンや、スズメの仲間のカオジロガビチョウ、インコの仲間のワカケホンセイインコなどいくつかの外来種が確認されています。

特にカオジロガビチョウは、「外来生物法」で特定外来種にも指定されており、このまま個体数を増やすと、本種と同じヤブ環境に巣をつくるウグイスなどと競合し、生息に影響を及ぼす可能性があるため、個体数や分布範囲、利用する環境など、その動向に注意する必要があると考えます。

ところで、外来生物は、もともとはペットとして飼育されていた鳥を意図的に野外に放したり、逃げ出したりして増えたものと考えられています。鳥に限らず、最近では外国のワニやカメ、クワガタムシなどが逃げ出して、野外で捕まるという例も多くみられます。動物を飼う場合には、自然環境や日本に古くからすんでいた種への影響を考え、最後まで責任をもって飼育するようにしたいものです。

注) 特定外来生物：外来生物の中で、生態系、人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれがあるものの中から指定される生物です。



カオジロガビチョウ

※裏表紙の写真：ウソ



前橋市生活環境部環境課

〒371-8601 群馬県前橋市大手町二丁目12番1号

TEL：027-224-1111

※写真、イラストの無断転用を禁止します。